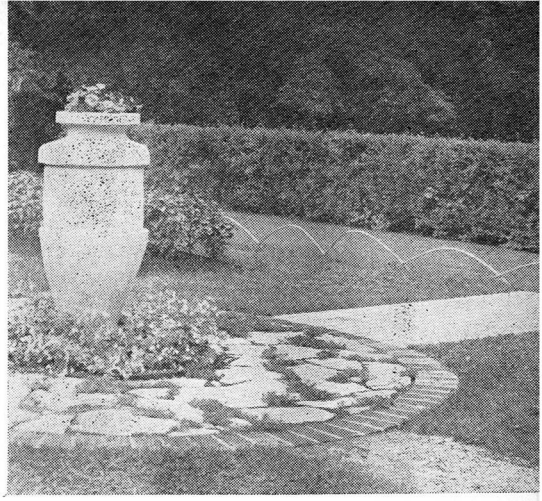
北海道の生垣

石田文三郎



完成したくろうめもどきの生垣

庭園における生垣は誠に重要なもので、せっかく見事な庭園が出来ても屏や生垣が貧弱であったなら庭園が引き立たぬものである。本州方面では気候が暖いので、いろいろの生垣すなわち、カナメモチ、マサキ、ヒサカキ、カラタチ、ビラカンサス、カイズカイブキ、ヒバ、ヒノキ、マキ、ドウダンツツジ、チャノキ、ウバメガシ、サワラ等その他いろいろの生垣用の樹木が用いられているが、北海道では冬の寒さと積雪とによって生垣用の樹木の種類は至って制限せられているので、以下少しく北海道に適する生垣用の樹木の種類とその生垣の作り方を記することにする。

一　いぼたのき
（一名、いぼた、もくせい科）

この木は本州及び北海道の野生にあるがいま生垣用に用いられているものは多少改良されたもので、北海道の野生のものより葉の形が少々大きく、葉の色も幾分黄色を帯び発育良好で、殊に枝張がよいものである。

(一)　いぼたの繁殖

いぼたの繁殖は挿木もできるが、主として実生により繁殖することが多い。種子は秋の十月頃になると小豆大の黒色の実が成熟するので、この実を採って表皮を取り、秋の十一月初め頃、畑地に油粕を三平方㍍につき、六デシ㍍くらいを施して地面を掘り起こして平にならし、苗床を作り、その上に**いぼた**の種子をばら播きし、その上から畑土を五㌢くらいの篩で通したものを二㌢くらいの厚さにふるいかけ、そのまま越冬させると　翌春雪どけ後五月下旬頃発芽するから、雑草を取り除き、密に生えたところは多少間引をし、人糞尿の腐ったものを二倍くらいにうすめて、六月頃から九月頃までの間に二、三回施すと秋の十月頃までには苗が一七、八㌢の長さに成長するので、秋の十月下旬から十一月頃苗を掘り取り、取りまとめて雪折れせぬよう地面に横にねかして仮植、翌春まで雪の下にして置き、雪どけ後四月下旬より五月初めの頃掘り起こし、土塊をくだき、平らにならしたなら七五㌢くらいの畦を作り、その畦の中に一㍍（約三〇坪）につき油粕を畦の中に一五㍍くらい施し、少々その上に土をかけたところに一二㌢くらいの間隔に一本の割で植込み、土をかけた後、灌水しておけばよい。追肥は六、七月二ヵ月の間に人糞尿の腐ったものを倍にうすめて二回程施せば、秋までには、成長の良いものは六〇㌢以上に伸びて、垣根用として用いられる。この際いぼたなどと軽く思って施肥を怠ると成長を疎外するもので、翌年垣根用には間に合わぬことがある。

(二)　斑入いぼたの繁殖

斑入いぼたは普通のいぼたから突然変異によって枝が変ったもので葉の色が多少黄緑色の葉の中に黄の斑点が入っているので誠に美しいもので、庭園にも玉作りなどとして用いらるるほか、生垣としても誠に美しいものである。

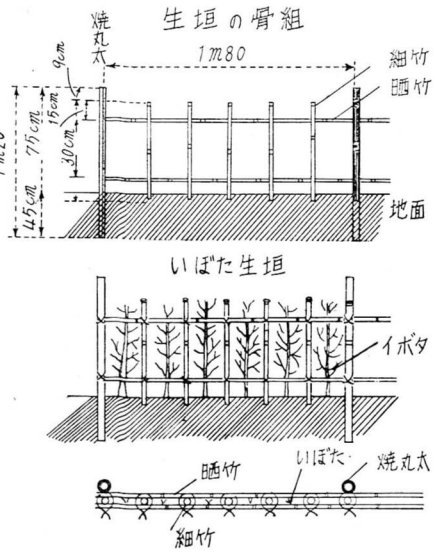
この斑入いぼたの繁殖は主として芽接及び挿木によって殖やすことができる。芽接は普通のいぼたに芽接するのであるが、素人では少々困難であるが、挿木は至って簡単であるので、行なってみるのも一法である。春雪どけの四月下旬頃斑入いぼたの幹を七、八㌢の長さに小刀で切り、その切口に粘土を軟らかく練って小指大に着け、地面に川砂を一〇㌢くらいの厚さに入れ、平らにならしたところに六㌢おきに一本ずつ三㌢くらいの深さの穴をあけて、この中に粘土の着けた苗を生け込み、多少根元を指先で押しつけ、如露で充分に灌水し挿木床の上方に葭簀をかけて日覆をすることが必要である。その後の灌水は毎日一回施せば一ヵ月くらいで発根するから、別に床を作って元肥として油粕の粉末を三平方㍍に対し四デシ㍍くらいを撒きちらし、よく耕したところへ二〇㌢くらいの間隔をおいて植込み、如露で充分に灌水して手入すると、その年の内に長さ二〇㌢くらいに苗ができるが、斑入いぼたの挿芽は二ヵ年培養しなければ生垣用に供することはできない。

(三)　いぼた四目垣の作り方

いぼたの生垣は北海道では伸びも早く、価格も割合に低廉に出来るところから、一般によく用いられている。

先ず、いぼたの生垣を作る時期は、春の四月下旬頃から五月下旬頃まで、また秋の十月初め頃から十一月の雪の降る頃までが最もよい。

生垣を作る場所がきまったなら、一㍍八〇㌢おきに深さ四五㌢の穴を掘り、この穴の中に、あらかじめ末口七㌢五㌫、長さ一



生垣の骨組・上面より見た図

糎二〇糎の焼丸太を用意して、その穴の中に四五糎の深さまで生け込み、親柱と親柱の高さは余り高低のないように生け込むことが必要である。親柱の生け込みが終わったところで、親柱の上方から二四糎のところへ、横に晒竹(長さ四糎五五糎のもの)釘で打ちつけ、その接手は細い竹の先に太い竹の穴のところを挿し込で伸ばして行き、親柱の終わったところで鋸で切り取り、第二段は晒竹を地上一八糎のところで親柱に横に釘で打ちつけ、上段と同じように接手を作って伸ばして行くことは上段と同じである。このように親柱と竹柵ができたところで、横竹の前側の地面を一二糎くらいの深さに掘り、ここにいぼたの二年苗(苗の長さ六〇糎以上)を親柱と親柱の間に六本くらいの割合で間隔を三〇糎くらいずつあけて、幹を横竹につけて植え込み、根元に充分土をかけて灌水する。これが終わったところで別に細竹を七五糎の長さに先を節止めとして切り、これを親柱と親柱の間で、しかもいぼたの間に間隔を適当にあけて六本ずつ立て、根元を地面に挿し込み、その高さは親柱の上方から九糎低く高さを揃えて立て、これが終わったところで上段も下段も横の晒竹の前に、更に晒竹で細竹といぼたの苗を中に夾んで細竹と横の晒竹の交叉点で棕梠の細縄で固く横十文字に縛れば、いぼたの生垣はできたのである。この生垣は五月中に植え込んだものは八月頃には相当新芽が伸びるので、側枝や上方の枝の特に伸びたものは垣刈鋏で適当に鋏んで形を作るようにすることが必要である。

施肥は、生垣に植え込んでから六月中旬頃から油粕または人糞尿の腐熟液を二倍にうすめて一、二回施肥してやると、成長を促進するものである。

このほか、おおばいぼたと称する、葉が少々大きく樹の形も大形のものがあるが、小枝の出具合が悪く一般生垣用として用いられぬ。

二　おんこの生垣（一位科）

おんこの生垣は北海道としては最も上等のものであって、この生垣が完成して六月頃の新芽の揃った時は誠に見事なものであるが、生垣用の苗が高価のことと、生垣として苗を植え込でから完成するまで約十年を要する等の為め一般には使用する人が少ない。

生垣を作る為の親柱や横の晒竹等はいぼたの時と同一であるがおんこの苗は実生後一〇年内外のもの（長さ約六〇糎以上）間隔は一糎八〇糎親柱と親柱の間に将来拡張の事を考えて四本植込むのが適当である。このおんこの苗の植込む時期は春六月初旬が適期であって、それ以外の四月の初めや九月、十月頃は苗の移植時期でないので、せっかく移植しても苗を枯らすことがあるからこの点には注意する事が必要である。

三　においひば（松杉科）

においひばは北米の原産で常緑、葉は鱗状、この生垣もなかなか見事のものであるが、札幌付近は冬の乾燥した風のため雪の上に出た部分が時々枯れることがあるので、場所によっては不適当であるが、旭川方面、帯広方面、富良野方面等、冬期風の少ない場所においては生垣として誠に見事なものができる。この樹の移植時期は五月下旬から六月初め頃で幹や葉によい香気をもっている。苗の植え込みは一糎八〇糎の間隔に四本植くらいが適当である。苗の繁殖は実生により五、六年で生垣用に用うることができる。

四　へびのぼらず（一名、おおとりとまらず、めき科）

へびのぼらずは本州及び北海道の山地に自生して、落葉灌木葉は長楕円形または長倒卵形葉に刺毛を密生し、幹には簇葉ごとに刺を有す。花は黄色にして七、八月頃小豆大の紅果を生ず。葉は十月頃紅葉して誠にうつくしい。

このへびのぼらずの生垣は幹に刺が生えておって人が生垣から入りにくいこと、また枝張りのよい事、実が紅色で美しいこと、葉の紅葉が美しいこと、寒さに強いこと等で生垣として誠に適しているが、苗を養成するのに実生から五、六年を要するので、まだ一般にはあまり用いられておらぬ。間隔は一糎八〇糎の間に六本くらいが適当で、移植の時期は春五月が適期である。

五　けやき（にれ科）

けやきは、本州に自生する落葉喬木で、幹の高さ数十糎に達し、葉は広披針形または長卵形にして、先端尖り縁辺に鋸歯を有す。葉は互生、春淡黄緑色の小形の花を着け、枝張りがよいこと、寒さに強いところから、北海道の生垣として近年使用されている。

この木を生垣に用いるには、春五月中旬頃、四、五年生の苗（高さ六〇糎以上）ものを一糎八〇糎の間に四本から五本植込めばよい。繁殖は実生によって行なう。

六　くろうめもどき（くろうめもどき科）

本州及び北海道の山地に自生し落葉灌木で幹の高さ二糎内外に達し針状に変じたる枝を有し葉は倒卵状楕円形で下部は楔形をなし上部は尖鋭となり縁辺には細かい鋸歯を有す。五月頃梢上葉腋に淡黄緑色の小形の花を叢生し花後黒色の小果を成熟す。本植物は雌雄異株が特徴である。

この木の生垣はあまり見受けませんが、枝がよく出て繁茂する事下枝があまり上らぬ事にて誠に見事なものである。移植は春五月頃が適期で苗の繁殖に実生から六、七年の永い期間を要することが欠点である。垣根に植え込みの間隔は一糎八〇糎に六本植え込みが適当である。

七　どうだんつつじ（しゃくなげ科）

どうだんつつじは本州四国九州の各地に自生している落葉灌木で各地の庭園樹として観賞用に供せられている。樹の丈二糎以上に達し、葉は倒卵形にして小さく細鋸歯を有し春は新芽と共に数個の花梗を抽出し愛らしい灰白色の鐘状花を下垂する。枝が多数分枝するのと秋は葉が紅葉するので生垣として誠に美しいものである。植込みの間隔は一糎八〇糎の間に五本くらいが適当である。繁殖は挿木によって行なっているが北海道では発育がおそいので本州で繁殖六〇糎ないし七五糎くらいの苗を使用する。苗が少々高価の事と生垣として完成するまでに年数がかかる事が欠点である。移植は春五月、秋十月行なうことができる。

このほか、にしきき、うこぎ、いちょう、くこ、すもも、落葉松など北海道の生垣として使用する事が出来るが今はあまり使用する人が少ない。

要するに北海道の生垣としては寒さにも強い、いぼたの生垣が一般によく用いられている。

（園芸部　顧問）